

中国語授業における異文化理解教育について ：理工系大学生対象授業での試みを中心に

小川，快之

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

197

(終了ページ / End Page)

220

(発行年 / Year)

2011-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007750>

中国語授業における異文化理解教育について ——理工系大学生対象授業での試みを中心に——

小川 快之

一、はじめに

中国語によるコミュニケーション能力を高めるためには、中国語の授業において、語学教育（発音・語彙・文法の教育）だけではなく、中国語が育まれた文化的な背景に関する教育、つまり、異文化理解教育も必要なのではないかと考えられる。こうした内容に関しては、従来から、多くの教員が、語彙や会話を教える際などに、さまざまな説明を行ってきたと思われる。また、すでに相原茂氏の著書や小川隆氏・陳仲奇氏・趙賢州氏・洪潔清氏などの論文で、中国語授業における異文化理解教育の必要性に関する指摘がなされている^①。

その中でも、中国語授業と異文化理解の関係性について包括的に論じている小川氏は、「異文化」を「生身の人間との交流のなかに現れてくる、異質な思考様式と行動様式の総体」であると考え、異文化理解教育における中国語授業の役割、つまり、コトバを通じて「異文化」そのものを体感することの重要性について述べ、さらに、語学科目の内容と連動させながら、その背景（発想の違いなど）を解説してゆくことにより、学生が、「自分の基準でなく、ひとまず相手の基準をもとに理解することができるといふ態度を培えるようにすることが大切であると指摘している^②。

また、中国語教育の観点から、異文化コミュニケーションにおける文化的ノイズの問題について考察した陳氏は、異文化コミュニケーションにおいて誤解の原因となる文化的ノイズは、言語学習の段階でも、大きな障害物になっており、その正体を解明するには、社会学・文化人類学など多くの学問からのアプローチが必要であると指摘し、さらに教育現場での密接な観察を重視し、具体的な研究モデルを設定し、大量な科学的データの分析によって、理論的に解明してゆくことが必要であると述べている。⁽³⁾

なお、中国語授業におけるコミュニケーション能力の育成について考察した胡玉華氏は、文法指導における「場面つき学習」が、中国語が「できる」力の向上・コミュニケーション能力の獲得に必要であると指摘しているが、⁽⁴⁾ここで指摘されている「場面」は、文化的背景（異文化理解）と密接に関係があると思われる。こうしたことから言えば、中国語によるコミュニケーション能力を高めるためには、やはり、異文化理解教育との連動が必要であると考えられる。

しかし、管見の限り、中級や上級の中国語教科書では関連テーマを扱った教科書があるものの、初級の中国語教科書でそうした内容について言及したものは依然として多くはないのが現状である。⁽⁵⁾そのため、初級中国語の授業で、「異文化」としての中国文化そのものを学習する機会はありません。また、それに加えて、高校の世界史の授業でも、異文化理解的な視点に立つて、中国社会の歴史的背景や歴史的展開について学習する内容はあまり多くはないように感じられる。⁽⁶⁾さらに、大学、特に理工系では、初級中国語の授業の受講生に比べると、（異文化理解的な内容を盛り込んだ教科書を使う機会もある）中級・上級中国語の授業を受講する学生はあまり多くはなく、大部分の中国語の授業の受講生は、初級、もしくは準中級レベルの授業で中国語学習を終えることが多いのが現状である。こうしたことから言えば、現在、仕事の現場を含め、日本と中国の民間レベルでのさまざまな交流の機会が増加して、その必要性が高まっているにもかかわらず、大学生、とりわけ理工系の学生は、大学卒業まで、「異文化」と

しての中国文化について学ぶ機会は少ないように考えられる。

以上のような状況を踏まえ、筆者は、以前、拙稿において、千葉大学や法政大学の担当授業で行った実験授業を検証しながら、中国文化に関する授業の工夫やその教育的効果について考察したことがある。⁷⁾しかし、検証例が少なく、そこで行った試み自体もごく初歩的なレベルにとどまっていた。そこで、本稿では、その後筆者が法政大学とA大学の担当授業で行った試みについて検証しながら、理工系の大学生に対する教育という視点も念頭におきつつ、さらに具体的な授業の工夫のあり方やその教育的効果などについて考察してみたい。

二、「何をどのように教えるのか」問題と今回の実験授業の内容

さて、初級中国語の授業において異文化理解の教育が必要であると言っても、では、具体的に言って、「何をどのように教えるのか」という問題が次に大きな課題となってくると思われる。しかし、こうした授業の工夫に関する研究は、管見の限り、前述した陳氏の論文などで述べられているだけで、まだ、多いとは言えないのが現状であるように感じられる。こうした問題について考えるためには、関連研究・教科書・教材等を調べる作業と併せて、受講する学生の状況（学生の関心や理解度など）を把握することも重要であると考えられる。そのためには、実際に中国文化に関する実験授業を行い、それに対する学生の反応を検証してみる必要があると思われる。そこで、以下では、この問題について考える作業の一環として、筆者が担当した（理工系の学生を対象とした）授業で行った試みについて検証してみたい。

筆者が今回実験授業を行ったのは、法政大学理工学部・生命科学部の初級中国語レベルの授業（週一回、前期・後期、自由選択）の二〇一一年度後期の授業（学生数…八名）（以下、実験授業①と略称）とA大学理工学術院で、中

国の言語と文化を学ぶことを主な目的に設けられた「中国語文化入門」の授業（週一回、半期、自由選択）の二〇一一年度前期の授業（学生数…五十七名）（以下、実験授業②と略称）、同年度後期の授業（学生数…四十七名）（以下、実験授業③と略称）である。なお、実験授業①を実施した授業は、主に小池一郎他『開門！中国語』（朝日出版社、二〇〇八年）を使って、初級中国語の学習作業を行うことを基本方針とした授業である。一方、実験授業②③を実施した授業は、周先民・高文軍『これからは中国語！』（朝日出版社、二〇一一年）を使って初級中国語の学習作業をしながら、筆者自作のプリント（「中国文化を知る」）や視聴覚教材を使って中国文化に関する講義を行うことを基本方針とした授業である。

実験授業の基本方針は、「日本の人々と中国の人々の発想の仕方や日本社会・中国社会の歴史的な背景には違いがあることについて理解すること」、「中国文化のもつ多様性について理解を深めること」、「中国文化をより多面的に理解できるようにすること」とした。具体的には、「中国人の生活習慣・思考様式・行動様式などに関する内容」、「中国の生活文化や伝統文化など、なるべく中国の一般庶民と交流する際に役立つ内容」、「中国社会の歴史的な背景について理解が深められる内容」などに関連したテーマを取り上げてみることにした。実験授業で扱ったテーマとその内容の概要をまとめたものが【表1】である。

【表1】 実験授業で扱ったテーマと授業の概要

①「中国の飲み物の話」…中国各地でよく飲まれているお茶の違い、一般に中国では（体に悪いと考えて）冷たい飲み物が好まれない傾向があることなどについて説明した。関連語彙の学習も行った。中国文化のもつ多様性にも留意して説明した。⁸⁾

②「中国料理の話」…中国料理には、気候風土の違いなどにより、さまざまな料理があることを説明した。所謂

「四大料理」(北京料理・上海料理・四川料理・広東料理)について、代表的な料理も取り上げながら説明した。^⑨

③ 「中国の食事習慣の話」…【資料1】参照。知っておくと良い食事習慣、食事の時に使える言葉などについて説明した。

④ 「中国における人の呼び方の話」…人の呼び方について、関連する基礎語彙、知っておくと良いことを説明した。親しい人には敬称をつけずにフルネームで呼ぶことが多いことや日本語の「くさん」に相当する万能語はないことなどについて説明した。

⑤ 「中国の伝統社会の話」…【資料2】参照。中国社会の歴史的な背景について理解を深めてもらうために、中国の伝統社会(宋代から清代の社会)における基本的な政治のあり方・家族のあり方について説明した。補足事項として、辮髪やチャイナドレスの由来についても説明した。

⑥ 「伝統中国」の都市と農村の話…【資料3】参照。江戸時代の日本とは違う点も多い「伝統中国」(宋代から清代)の都市と農村のあり方について説明した。

⑦ 「北京の話」…元・明・清・中華人民共和国の首都北京の基本的なあり方・名所旧跡・乗り物・旧市街について説明した。地図やDVD教材を使い、北京オリンピックのテーマソング「北京欢迎你」も紹介した。

⑧ 「中国語の歌の話」…中国の民歌やポップス=C-POP(流行歌曲)などに関する基礎知識について説明した。中国民歌「太湖船」& J-POP「Everything」(歌手:MISIA)のカバー曲(歌手:辛晓琪(ウィニー・シン))も紹介した。^⑩

⑨ 「京劇の世界」…中国の伝統演劇である「京劇」に関する基礎知識(演じられる物語・役柄・隈取りの意味など)について説明した。孫悟空が登場するビデオの一部も鑑賞した。^⑪

【資料1】プリント「中国文化を知る③中国の食事習慣の話」の具体的な内容^{①②}

知っておくとよいこと…

①「いただきます。」「ごちそうさま。」は言わない。↓言葉の使い方↓日本と中国では違うこともある。単に日本語を中国語にして使えばよいというわけではない。生活習慣を知る必要がある。

*普通は…。例えば、「吃吧!」（食べましょう。）と言って食べ始め…。最後は、同席した人から、「你不吃吗?」（食べないの?）と言われ、「我不吃, 吃饱了。」（食べません。お腹が一杯です。）と答えて終わる。↑相手を意識して言葉を使う。

②わりかん（A A制）はあまり好まれない。若い世代や都市部ではA A制にする人もいるが…。

*普通は…。誘った方がおごる。「今天我请客。」（今日は私がおごります。）と言う。次回はおごられた方が誘う。「下次我请吧!」（次は私がおごりましょう。）などと言う。ただ、おごられた方も、一応、払う態度をみせるのが礼儀。

※わりかん↓台湾では「各自付钱。」と言う。お勘定↓「买单。」

③店員に呼びかける時は…。

「服务员」（店員・従業員）。↑「小姐」（女性店員）ということもあるが、少し古い言い方。

「老板」（商店の主人）。「劳驾, …」（すみませんが、…）。↑人に頼み事をする時に使う。

「请问, …」（お尋ねしますが、…）。↑人にものを聞くとときに使う。

《食事をするところ》「餐厅」（レストラン）「菜馆」（料理屋）「茶馆」（茶屋）「咖啡厅」（カフェ）「快餐店」（ファーストフード店）

《食べ物——軽食》「汉堡包」（ハンバーガー）「比萨饼」（ピザ）「蛋糕」（ケーキ）「三明治」（サンドウィッチ）「冰激

凌」(アイスクリーム)

【資料2】プリント「中国文化を知る⑤中国の伝統社会の話」の具体的な内容⁽¹³⁾

中国の伝統社会↓安易に江戸時代の日本のイメージで考えてはいけない。

↓同じ東アジア世界でも伝統社会のあり方には大きな違いがみられる。

*中国の歴史の流れ…中国文明↓殷・周↓春秋・戦国時代↓

↓秦・漢・魏晋南北朝↓隋・唐↓宋・元↓明・清↓中華民国↓中華人民共和国

↑皇帝支配(中央集権体制)↓

↑伝統中国↓近現代中国…

平安・鎌倉・室町・江戸 ※江戸「伝統日本」

*中国の伝統社会(漢民族)では…。

①「士」武士」ではない(江戸時代の日本↓「士農工商」)。支配階級「武士ではない。

☆士は知識人のこと。基本的には、儒教の経典などを勉強して、科挙(「科挙」)「官僚任用試験に合格した知識

人が高級官僚となり、皇帝を支えて政治を行う体制。

↓日本の武士「世襲。中国の伝統社会↓庶民(男子)でも科挙に合格すれば高級官僚になれた。江戸時代の日本

より(社会的身分が)流動的な社会であった。

②伝統中国の家族には「イエ」という概念がなかった。

☆伝統日本↓長男が「イエ」(財産)を相続する。↓安定性あり。「本家」「分家」の区別がある。

↓「お家大事」「お家断絶」。血族でない人でも養子になって「イエ」を受け継ぐことができた。

☆伝統中国の家族の特徴は…。

①父系の家族である。②妻は別姓である。↑現在も。韓国も。③財産は均分相続である。主に男子。↓財産が細分化されやすい。↓不安定性あり。

↓父系の血族ネットワーク⇨宗族（「宗族」）がつくられた。世代⇨輩行（「輩行」）を重視した秩序があった。

※同世代は名前に同じ文字や同じ偏を使う。

（中略）¹⁴。

〔補足事項〕清代（皇帝⇨満洲族）の風習⇨辮髪（「辮发」）は満洲族のもの。チャイナドレス（「旗袍」）も満洲族の女性の服装に由来。もともと漢民族の風習・服装ではない。

【資料3】プリント「中国文化を知る⑥「伝統中国」の都市と農村の話」の具体的な内容¹⁵

中国の伝統社会における都市と農村⇨江戸時代の日本の都市と農村のあり方と違う点も多い。

*都市と農村⇨「城市（「城市」）⇨⇨郷村（「乡村」）。地方政府がある都市は城壁で囲まれていた。

※「进城」（市内へ行く）。（中略）¹⁶。

*「伝統中国」の農村⇨江戸時代の「ムラ」的な共同体（村落共同体）はなかったらしい。

☆江戸時代の「ムラ（村）」とは…。①「ムラ」のメンバーが特定されていた。全体集会があり、そこで「村のオキテ（掟）」が決められていた。「ムラ」は、名主（関東）・庄屋（関西）など「村方三役」の指導の下、「村のオキテ」に従って運営されていた。②「ムラ」は、「入会地」（山林）など共同の財産を持ち、道路の修理などさまざまな共同業務があった。それにより、「ムラ」のメンバーの生活が保障されていた。③「ムラ」で起きた紛争は基本的に「村のオキテ」に従って、村内で処理されていた。↓処罰（村八分）。

☆「伝統中国」の農村は……。①農村のメンバーがあいまい。全体集会はない。②農村の共同財産はあるが少ない。道路の修理などは私的に行うか、政府が行うことが多い。③農村内で起きた紛争は有力者などが調停することもあるが、それに従う必要はなく、県に訴訟を起こすことも自由であった。(中略)¹⁷。「伝統中国」の農村↓不安定で流動的↓人々は生きて行くために、さまざまな人間関係(人的ネットワーク)をつくっていった。↓人間関係が重視される社会。父系の血族ネットワーク(宗族)もその一つ。※「打官司」(訴訟を起こす)。

実験授業①では、授業が一般の語学授業であるため、少なめにして、テーマ①②③⑤を使って授業を行った。実験授業②③では、「文化入門」を兼ねた授業であるため、それにテーマ④⑥⑧⑨を加えて授業を行った(ただし、実験授業③については、実施時間の都合により、本稿で検証するのはテーマ①②③⑤を使った授業のみ)。なお、配布プリントでは、一般教養教育的な観点から考えて、学生(特に理工系の学生)にとって分かりやすい内容にするために、研究上微妙な問題がある事柄についても、あえて(詳しい補足説明などは加えず)やや単純化して説明してみた(そのため、説明方法については、今後さらに検討する余地は多いと思われる)。

三、「学生の認知度」に関する分析

まず、実験授業の講義内容に関する学生の反応について分析する前に、説明した事項に関する学生の認知度について確認してみたいと考え、授業後、アンケートを実施してみた(なお、実験授業②では、今回アンケートを取らなかったため、実験授業①③で取り上げた内容のみ)。アンケート結果をもとに、実験授業①③で説明した事項の学生の認知度を示したものが【表2・3】である。

【表2】 説明事項に関する学生の認知度（実験授業①より）（学生数…八名）

テーマ①「中国の飲み物の話」…中国各地でよく飲まれているお茶の違いについて（一名）。テーマ①「中国の飲み物の話」…一般に中国では冷たい飲み物が好まれない傾向があることについて（一名）。テーマ②「中国料理の話」…「四大料理」について（二名）。テーマ③「中国の食事習慣の話」…「いただきます。」「ごちそうさま。」は言わない。」ことについて（〇名）。テーマ③「中国の食事習慣の話」…「わりかん（AA制）はあまり好まれない。」ことについて（〇名）。テーマ⑤「中国の伝統社会の話」…「士Ⅱ武士」ではないことについて（〇名）。テーマ⑤「中国の伝統社会の話」…伝統中国の家族には「イエ」という概念がなかったことについて（〇名）。テーマ⑤「中国の伝統社会の話」…辮髪は満洲族の風習に由来することについて（〇名）。

【表3】 説明事項に関する学生の認知度（実験授業③より）（学生数…四十七名）

テーマ①「中国の飲み物の話」…中国各地でよく飲まれているお茶の違いについて（七名）。テーマ①「中国の飲み物の話」…一般に中国では冷たい飲み物が好まれない傾向があることについて（五名）。テーマ②「中国料理の話」…「四大料理」について（十一名）。テーマ③「中国の食事習慣の話」…「いただきます。」「ごちそうさま。」は言わない。」ことについて（七名）。テーマ③「中国の食事習慣の話」…「わりかん（AA制）はあまり好まれない。」ことについて（三名）。テーマ⑤「中国の伝統社会の話」…「士Ⅱ武士」ではないことについて（三名）。テーマ⑤「中国の伝統社会の話」…辮髪は満洲族の風習に由来することについて（三名）。

以上の結果を見ると、実験授業①③ともに、テーマ①②の内容については、すでに知っていた学生が一定数いることが窺えるが、テーマ③の「わりかんはあまり好まれない」やテーマ⑤の内容に関しては、ほとんどの学生が知らないこと、全体的に言えば、実験授業の内容について知らない学生が大多数であることが確認できる。

四、「学生の関心」に関する分析——講義内容について（一）

では、以上のような講義内容に対する学生の反応はどのようなものだったのだろうか。実験授業①③では、授業後、「講義内容に対する関心の有無」と「授業内容に関する感想・さらに知りたいと思ったこと」についても、アンケートを実施してみた。その結果が【表4・5】である。

【表4】「中国文化を知る」①②③⑤に関する学生の関心度（実験授業①より）

- ①「中国の飲み物の話」…はい（二名）・まあまあ（五名）・いいえ（一名）
- ②「中国料理の話」…はい（四名）・まあまあ（二名）・いいえ（二名）
- ③「中国の食事習慣の話」…はい（八名）・まあまあ（〇名）・いいえ（〇名）
- ⑤「中国の伝統社会の話」…はい（三名）・まあまあ（四名）・いいえ（一名）

【表5】「中国文化を知る」①②③⑤に関する学生の関心度（実験授業③より）

- ①「中国の飲み物の話」…はい（十八名）・まあまあ（二十八名）・いいえ（一名）
- ②「中国料理の話」…はい（二十九名）・まあまあ（十七名）・いいえ（一名）

③「中国の食事習慣の話」…はい（二十三名）・まあまあ（二十二名）・いいえ（二名）

⑤「中国の伝統社会の話」…はい（十七名）・まあまあ（二十五名）・いいえ（五名）

また、記述部分では、例えば以下のような感想が寄せられた。「いただきます」「ごちそうさま」を言わないことや冷たい飲み物を好まないことに驚いた」「食事習慣のような日常生活における日本と中国の違いをもっと知りたいと思った」（以上、実験授業①の受講生より）。「知らないことばかりだったので楽しかったです」「どれも知らないことであつたので、知ることができてよかった。また、中国へ行くときに中国の習慣を知っておくことも大切だと感じた」「中国ではこうするが、日本ではこうするという違いが勉強になります」「日本では当たり前であることが、中国ではそうではないということには面白かった。なぜそうなのか、その他にもあるのか、など興味がわきました」「中国の飲み物や料理の話は、日本と違うところもあつてとても面白かったです」「飲み物や食事習慣など、今の中国に行つて人とコミュニケーションを取る時に使える話は実用性もあり、興味深かったです」「地域によつて飲み物が異なつていることは知らなかったし、興味深いと思いました」「中国の食事習慣が日本や韓国とも異なっているのは興味深かったです。中国は多民族社会なので、民族ごとの習慣の違いなども知りたいと思いました」「今までは中国をひとくくりに考えていましたが、あんなに広いのだから文化が分かれているのは当然なのだなあと思いました」「伝統社会の仕組みが日本と大きく違うところには驚いた」「伝統社会の話は日本と違う部分が多く、とてもためになりました」「日本と違い、中国の社会で「士」が武士を示すものではないということが面白く思いました」「中国と日本ではあまり文化に違いがないという認識でしたが、日本と中国では細かいところで文化の違いがあつたことに驚きました。特に「イエ」の話は、ほとんど日本と異なることが分かつてとても勉強になりました」「中国文化で特に興味をもつたのが「イエ」の概念がないということです。財産をすべての子供（男子）に均分相続するのは平等でよいと

思いましたが、「イエ」を相続しないことは安定性がないということを知って、はじめて日本の相続制度の利点を知れました」(以上、実験授業③の受講生より)。

以上の結果を見ると、実験授業①③ともに、全体的に「いいえ」はほとんどないこと、特にテーマ②③に対する学生の関心度が高いこと、また、理工系の学生の中でもテーマ⑤といった歴史的な話題に関心をもつ学生が少なからずいること(「はい」は全体から言って四割弱程度)が確認できる。全体的に「いいえ」がほとんどないことは、【表2・3】や「知らないことばかり」という学生の感想から考えると、初めて知った新鮮さが背景にあるのではないかと思われる。さらに、感想の内容を見ると、「日本と中国では発想の仕方や歴史的な背景に違いがあること」や「中国文化のもつ多様性」に対する理解を深めるという前述した授業の基本方針が学生に一定程度理解されていることが窺える。また、さらに習慣の違いについて知りたいという感想もあることから、講義内容が「異文化」としての中国文化に対する学生の関心を喚起していることも窺える。

五、「学生の関心」に関する分析——講義内容について(二)

以上、実験授業①③を中心に検証してきたが、より多くのテーマを取り上げた実験授業②では、学生の具体的な反応を知るために、期末試験で、「講義テーマの中から、関心をもった事項を選び(複数可)、①選んだテーマ、②そのテーマに関する説明、③そのテーマに関する考察(関心をもった理由、「なぜ…?」と思ったこと、他の国の文化と比較して考えたこと、さらに知りたいと思ったことなど)を詳しく書く」という問題を出してみた。試験は「筆記用具以外(机上)持ち込み不可」としているため、学生が書く内容をじっくり準備できるように、以上の内容は、事前に学生に知らせておいた。学生が試験で考察テーマとして取り上げたものをテーマ別に分類した結果が【表6】であ

る（複数回答あり）。

【表6】学生が考察テーマに取り上げた講義テーマ

- ①「中国の飲み物の話」（十三名）。②「中国料理の話」（十五名）。③「中国の食事習慣の話」（十七名）。④「中国における人の呼び方の話」（三名）。⑤「中国の伝統社会の話」（五名）。⑥「伝統中国」の都市と農村の話」（五名）。
- ⑦「北京の話」（二名）。⑧「中国語の歌の話」（二名）。⑨「京劇の世界」（三名）。

なお、学生の考察部分には例えば以下のようなことが書かれていた。「中国人がお茶を夏でも熱いまま飲んでいるということがとても印象的で、中国に留学していた高校の友人が夏であろうと熱い方が味も出てよりおいしく飲めると言っていたことを思い出し、最も興味がわいた」「私も中華料理を食べたことは何度もありますが、こんなに食文化が違うとは思わなかった。……食事の際、全員が揃ってから食べたり、あいさつをするのは珍しい方だったので、日本は特殊なのかなあと感じました」「このテーマに関心を持った理由は、小学生の時に、少し内容は違いますが、中国の食事文化について習ったことがあることを思い出したからです。小学生の時に習ったのは「中国では、食べ終わって、もうお腹が一杯になった時は、料理を少し残して「お腹が一杯です」ということを示す」ということでした。「少し残す」ということが「美味しかった」という意味でもあるということを知ってとても驚きました。このことと「いただきます」や「ごちそうさま」を言わないということから考えて、中国人は食事に関しては、言葉で言って感謝するというよりも、態度で示して感謝するのかと考えました」「日本の江戸時代は、農民や商人の身分の人たちはほとんど権力者になることはできないという、家柄によって身分が決定されてしまう社会であったので、中国と比較すると閉鎖的な社会であったのだなあと感じました。……科挙が及ぼした影響についてさらに知りたいと思いました」。

以上の結果を見ると、テーマ①②③といった食文化に関するテーマに多くの学生が関心を示していることが分かる。その中でも、異文化理解的に重要な内容を含んだテーマ③に対する関心度が高い点は注目できる。また、テーマ⑤⑥といった歴史的な話題に関心をもつ学生が一定数いることも分かる。こうした結果は実験授業①③の結果ともほぼ合致している。また、考察の内容を見ると、講義内容以外の異文化理解に関する事柄とも関連させて論じている記述もみられ、試験問題としたことが、「異文化」としての中国文化に対する学生の関心度や理解度をより高めていることが窺える。なお、実験授業①③の結果から考えると、テーマ⑤など、選択したテーマ以外についても、(学生自身があまり考察を深められないので、考察テーマにするまでには至らなかったが) 学生が関心をもったテーマはあると思われる。当然のことながら、学生の関心度が高くなっても、教育上必要な内容は説明する必要があると思われるので、こうした学生の関心度を過度に重視することはよくないと考えられるが、学生の学習意欲を喚起させるという観点から言えば、授業計画を練る上で、こうした学生の関心度も考慮に入れる必要はあるのではないかと考えられる。

六、「学生の関心」に関する分析——学生の自主調査について

以上、講義内容に対する学生の反応について検証してきたが、実験授業②では、今後の授業計画を考える上で、さらに、講義テーマ以外について、「学生がどのようなテーマに関心をもつのか」ということについて、より幅広く把握してみたいと思い、また、学生の中国文化に対する関心をより高めたいという教育上の意図もあり、期末試験では、上記の課題に加え、学生が中国文化に関して自主調査をする課題も出してみた。具体的には、「授業内容以外について、事前に自分で中国文化(ここでは幅広く考えて、中国に関することなら何でもよい)のようにアナウンスをした)について調べてもらい、それを事前に覚えて、①テーマ(複数可)、②その内容の説明、③その内容に関する考

察を詳しく書く」という形式で実施した。学生が自分で興味をもって調べたテーマを内容別に大まかに分類した結果が【表7】である。

【表7】学生の「中国文化」に関する自主調査テーマ

- ① 中国人の生活文化・生活習慣・思考様式・行動様式について（二十五名）
「中国人の結婚に関する価値観の変化・恋愛について」（二名）。「中国での買い物について」（九名）。「中国でのゴミの捨て方について」（三名）。「謝罪に見る中国文化」（二名）。「中国の食文化について」（二名）。「中国の化粧の文化について」（二名）。「中国と日本のビジネスマン」（二名）。「中国の店の人々の習慣」（二名）。「中国の人づき合いについて」（二名）。「中国との習慣の違い」（二名）。「中国人の人間関係について」（一名）。「中国のトイレについて」（二名）。「中国人と日本人の考え方」（二名）。
- ② 現代中国の政治・社会情勢について（十七名）
「中国での著作権について」（二名）。「中国の卓球衰退の理由」（一名）。「中国の交通について」（三名）。「中国の教育について」（一名）。「ジャイアントパンダの保護と人気」（一名）。「現代中国の若者の暮らし方／蟻族と呼ばれる人達について」（一名）。「中国の携帯電話市場について」（二名）。「一人っ子政策の利点と欠点」（二名）。「日本人があり得ないと思うこと」（一名）。「中国の政治について」（二名）。「現代中国の身分証明書」（一名）。「中国の死刑制度」（二名）。
- ③ 中国の医療・武術について（六名）
「中国の武術」（二名）。「中医学について」（一名）。「太極拳」（二名）。「気功について」（一名）。
- ④ 中国の伝統文化について（六名）

「チャイナドレスの歴史」(三名)。「マージャンについて」(一名)。「中国の春節・年末年始の行事について」(二名)。

⑤ 中国の言語文化について (五名)

「中国人の名前について」(一名)。「日本人意識にある「中国人の話し方」アル、カ？」について」(一名)。

「中国と日本で意味が違う熟語や漢字」(一名)。「中国の外来語の表記」(二名)。「中国の漢字」(一名)。

⑥ 中国の演劇・映画・音楽について (三名)

「中国の映像文化」ドラマと映画から見る日中の違い」(一名)。「中国の演劇」(一名)。「中国の音楽」(一名)。

⑦ 中国の歴史・古典小説について (七名)

「(秦始皇帝陵) 兵馬俑坑」(一名)。「中国の世界遺産」(二名)。「三国志について」(二名)。「項羽と劉邦について」(一名)。「水滸伝」(一名)。

以上の内容を見ると、学生の関心は多岐にわたっていることが分かる。その一方で、異文化理解と直接的に関連してくる中国人の生活文化・生活習慣・思考様式・行動様式といったテーマが、講義テーマに対する関心度と同様に比較的に多くの学生の関心を集めていることも確認できる。中国人の生活文化・生活習慣・思考様式・行動様式に関する学生の具体的な考察では、例えば以下のような記述がみられた。

「中国のビジネスマンの特徴として、話す速さが速い、声が大きい、自己主張が強い、組織より個人、豊かさ〓お金などがあげられるそうです。中国は競争社会であるため、自己主張をしないと逆に自分が不利な立場になってしまうこともあるそうです。日本人は逆に声が小さい、自己主張が少ない、組織という考え方が強い、豊かさ〓ライフスタイルなどがあげられます。また、中国人の場合、意見を言うときに「自分はこう思う」というのをしつかりいうのに対し、日本人は「〓かもしれない」などあまり自分の意見を断定しないため、相手に考えが伝わりにくいということもありま

す。……私がなぜこのテーマを選んだのかというと、最近日本の企業は中国人獲得に向かってしていると聞いて、日本人と中国人の差はなんなのだろうと思ったからです。……中国と日本のビジネス界には礼儀やルールに関して多くの違いがあるそうなので、中国人と接する時には失礼のないようにしっかりと文化を学ぶことが必要だと思いました」。

「中国では、初対面の人にはあまり親切にしないという文化があるそうです。なので、飲食店などの店員の態度が非常に素っ気無いものであることが多いそうです。しかし、逆に親しい間柄になるととても親切にしてくれるそうです。……また、親しい人への気持ちを伝える手段として、自宅に呼び料理を食べさせるという文化があるそうです。このような料理は食べきれないくらい出すのがもてなす側では良いとされ、逆に客側としては全部食べてしまうのは失礼となるそうです。……人づき合いの文化も日本とは大分違って面白いと感じました。……中国に旅行に行った時に、店員の態度が素っ気無い態度でも腹を立てずに「文化の違いなんだ」と考えるのが正しい対応だと思いました」。

「中国人の人との接し方は多少冷たく映えることが多々あるそうです。……しかし、根気よく関係を続けていけば、中国人は驚くほど親切であることが分かるそうです。……体調を崩したりすれば親身になって介抱してくれたりするそうです。……中国人は冷たいという評価は適さないと考えます。これは、中国人がむやみに他人に愛想を振りまくことがないことにより、そう受け取られるのであって、決して人間自体が冷たいのではないと思います。限られた気を許した人にだけ、本当の自分を見せるのであり、元々は親切な人が多いと思います」。

「中国において店の人は買う人に対して、売って「あげる」という態度なのでかなり無愛想だそうです。……今回文化の違いについて調べて、自分の国の文化を押し付けるのではなく、他国の文化を受け入れるということも重要であることが再認識できました」。

「中国では、品物を買ったお客さんに対して「ありがとうございます」とは言わないそうです。客の方から「謝謝！」（ありがとう）と言うのが普通だそうです。それは日本のように「お客様は神様」といった考えはなく、店側

に「売ってあげた」という考えがあるからだそうです。また、商品やおつりを渡す時に投げるように渡すことがあるそうです。……日本では、品物やおつりを投げたら、失礼な店員だなあとか不親切だなあと感じると思うけれど、中国は違うのだと知ってびっくりしました」。

「同じアジアなのにもかかわらず、整形に対しての考えが全く違うそうです。……日本人の化粧は「主張や感情の淡泊さ」が現れていて、中国人の化粧は「熱い気質」が見受けられ、韓国人は「はっきりした主張や感情」が見られるような気がしました」。

以上の学生の考察内容を見ると、中国人の生活習慣・思考様式・行動様式などについて、さらに深く調べて考察した記載が多くみられることが分かる。本授業の講義内容（テーマ③など）がこうしたテーマに対する学生の関心を喚起している可能性があること、また、期末試験における自主調査の課題が「異文化」としての中国文化に対する理解を深める作業として教育的効果があることが窺える。今後さらに上記の内容も参考にしながら、講義で中国人の生活文化・生活習慣・思考様式・行動様式に関するテーマを中心に、より幅広いテーマを取り扱うようにすれば、より学生の関心度や理解度を高められるのではないかと考えられる¹⁸。なお、今回はできなかったが、学生の理解をより深く確かなものにするためには、こうした課題を期末試験ではなく、中間試験などで出題し、試験後、教員が適宜コメントを加えるという作業をすることも検討してみる価値はあるように感じられた。

七、おわりに

以上、本稿では、初級中国語授業における異文化理解教育について考察する作業の一環として、理工系の大学生を対象とした授業（法政大学理工学部・生命科学部とA大学理工学術院の担当授業）で行った実験授業の内容について

検証してきた。今回の検証結果を見る限りにおいては、実験授業で実施した「中国人の生活文化・生活習慣・思考様式・行動様式や中国社会の歴史的な背景などに関する講義」の内容について、多くの大学生（特に理工系の学生）が知らない可能性が高いことが確認できた。また、それまで知らなかったこれらの内容を実験授業で知って、そうした事柄に関心をもつようになる学生がいることも窺えた。さらに、理工系の学生の中でも、伝統社会に関する歴史的な話題に関心をもつ学生が少なからずいること（今回の試みでは四割弱程度）も確認できた。また、「学生による自主調査も取り入れた試験問題」が、「異文化」としての中国文化に対する学生の関心度・理解度（特に「日本の人々と中国人の人々の発想の仕方や日本社会・中国社会の歴史的な背景に違いがあることに対する理解度」）を高める可能性があることも確認できた。講義内容に関しても、学生の自主調査テーマに関しても、中国人の生活習慣・思考様式・行動様式に関するテーマに興味を感じる学生が比較的に多かったが、こうした内容に関する教育は、冒頭で述べたように、中国語によるコミュニケーション能力を高める上で重要な内容であると考えられるので、今後の授業では、さらに関連した授業の工夫をする必要があると思われる。また、その他のテーマについても、筆者の説明方法が未熟なため、学生の関心を喚起できていないだけで、説明方法などを工夫すれば、学生の関心をより高めることができるテーマもあると考えられる。さらに、学生の自主調査の結果から考えると、学生の関心は多様であることが分かったので、より多くの学生に中国文化に関心をもってもらうためには、初級中国語の授業で、たとえ入門的な内容であっても、中国文化に関する幅広い話題を紹介することが必要であるように感じられる。現実的に、「文化入門」の授業ではない一般の初級の中国語の授業の場合は、多くの内容を盛り込むことは難しいと思われるが、特に、中国語の授業以外に、中国文化について理解を深める機会が少ない理工系の学生の場合は、（その必要性を考えると）、中国人の生活習慣・思考様式・行動様式に関する内容などを、語学教育と連動させながら、少しでも多く導入することは教育上必要な作業であるように考えられる。

なお、今回の実験授業で行った中国人の生活習慣・思考様式・行動様式などに関する講義内容は、分量としてはあまり多くはないので、中国語授業と異文化理解教育の連動を進めるためには、今後、さらに教材となりうるテーマの開拓やそれを活用した授業方法の工夫などを行いながら、より有効性が高い教育方法を探求してゆく必要があると考えられる。また、本稿では理工系の学生を対象とした授業を中心に分析したが、さらに理工系以外の学生を対象とした授業における状況も検証してみる必要があると思われる。読者の方々のご教示を賜れば幸甚である。

註

- (1) 各氏の著書・論文は以下のとおり。相原茂『中国語の学び方』（東方書店、一九九九年）。小川隆「異文化」理解のための初修外国語——中国語を中心として——（『論集〈駒澤大学〉』五五、二〇〇一年）。陳仲奇「異文化コミュニケーションにおける文化的ノイズに関する一考察——日本における中国語教育の場合」（『成蹊大学一般研究報告』三一、二〇〇〇年）。趙賢州「論外語教学与文化導入——兼論教学模式——」（『外国語科研究紀要（東京大学教養学部）』四〇—五、一九九二年）。洪潔清「中国語教育における文化紹介の必要性」（『新島学園女子短期大学紀要』二一、二〇〇一年）。なお、「異文化」として中国文化を理解することの必要性に関しては、三瀧正道「日中異文化コミュニケーション論序説（その一）」（『中国研究（麗澤大学）』一〇、一一、一二、二〇〇二、二〇〇三、二〇〇四年）などでも指摘がなされている。
- (2) 前掲小川「異文化」理解のための初修外国語」。
- (3) 前掲陳「異文化コミュニケーションにおける文化的ノイズに関する一考察」。

- (4) 胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成——「わかる」中国語から「できる」中国語へ——』（東方書店、二〇〇九年）。
- (5) 異文化理解教育を意識した初級教科書としては、相原茂・陳淑梅・飯田敦子『日中いぶこみ広場』（朝日出版社、二〇一一年）などがある。なお、中級教科書では、池田貞子・張国璐『中国ってこんな国！——素顔の「漢流」生活——』（朝日出版社、二〇〇八年）、林曙光・葛慧芬『伝統と新しい中国人——日本人との比較——』（白帝社、一九九八年）などがある。
- (6) 拙稿「『宋—清代中国の法律と社会』案内」（『歴史と地理——世界史の研究（山川出版社）』一三〇、二〇一二年）等参照。
- (7) 拙稿「中国語教育における中国文化紹介の試み」（『言語文化論叢（千葉大学）』三六、二〇〇九年）。なお、関連した授業の工夫として、歌の活用に重点を置いた試みも行った（以下の文献参照）。拙稿「中国語授業における歌の活用の有効性について」（『言語文化論叢（千葉大学）』四、二〇一〇年）。櫻井拓也・筆者共著「外国語教育における歌の活用と異文化理解について——J-POPのカバー曲を使った試みを中心に——」（『異文化コミュニケーション研究（神田外国語大学）』一三三、二〇一一年）。また、京劇紹介に重点を置いた試みも行った（以下の文献参照）。拙稿「授業の工夫⑮京劇紹介の試み」（『小溪——「高校中国語教育」の流れをつくる（国際文化フォーラム）』三八、二〇〇八年）。
- (8) 前掲拙稿「中国語教育における中国文化紹介の試み」参照。
- (9) 前掲拙稿「中国語教育における中国文化紹介の試み」参照。
- (10) 前掲拙稿「中国語授業における歌の活用の有効性について」、前掲櫻井・筆者共著「外国語教育における歌の活用と異文化理解について」参照。

- (11) 前掲拙稿「授業の工夫⑮京劇紹介の試み」参照。
- (12) 本プリントは、前掲相原『中国語の学び方』一〇二—一〇六頁、一七三—一七四頁などを参考にして作成した。なお、プリントの実物は手書きで、中国語部分はピンインつき〔資料2・3〕も同じ。
- (13) 本プリントは、滋賀秀三『中国家族法の原理』（創文社、一九六七年）、『漢民族と中国社会』（山川出版社、一九八三年）第V章「社会結合の特質」（執筆：末成道男）、上田信『伝統中国——〈盆地〉〈宗族〉にみる明清時代』（講談社選書メチエ、一九九五年）、石橋崇雄『大清帝国への道』（講談社学術文庫、二〇一一年）などを参考にして作成した。
- (14) この部分には、滋賀秀三氏の説明（前掲『中国家族法の原理』六六—六八頁など参照）などを参考にして作成した図を添付した。図では、「中国の伝統社会の家族↓組合的（助け合い）。↓宗族の財産をつくる。日本の伝統社会の家族（イエ）↓財团的。」と補足説明した。
- (15) 本プリントは以下の文献等を参照して作成した。大澤正昭編著『主張する〈愚民〉たち——伝統中国の紛争と解決法』（角川書店、一九九六年）。足立啓二『専制国家史論——中国史から世界史へ』（柏書房、一九九八年）。拙著『伝統中国の法と秩序——地域社会の視点から——』（汲古書院、二〇〇九年）。なお、詳細は、前掲拙稿「宋—清代中国の法律と社会」案内」参照。
- (16) この部分には、城壁がある地方都市の様子が視覚的に分かるように、清代の地方志である同治『鉛山県志』巻首所掲の絵図（清代の江西省鉛山県の様子を描いたもの）を添付した。
- (17) この部分には、江戸時代の「ムラ」と「伝統中国」の農村における紛争の処理のあり方を確認する図を添付した。図では、「江戸時代の「ムラ」↓まとまりが強い（村落共同体）。「伝統中国」の農村↓まとまりが弱い（村落共同体がない）。不安定で流動的な状態。」と補足説明した。

(18)

こうしたテーマに関する教材を作成する際には、田島英一『「中国人」という生き方——ことばにみる日中文化比較』(集英社新書、二〇〇一年)、園田茂人『中国人の心理と行動』(NHKブックス、二〇〇一年)、前掲三瀧「日中異文化コミュニケーション論序説(その一)」「(その二)」や註(5)所掲の教科書などが参考になると思われる。